

日本語教育を思う —バングラのルパル先生、別科へ勉強に来る—

Thoughts on Japanese Language Teaching
— A Teacher from Bangladesh Studies Japanese —

近藤 功

0 はじめに

世界中で何百万という人たちがさまざまな学校で日本語を勉強しており、これから日本語教育を始めたいと熱望している外国の教育機関もまた驚くほど多いのです。今回この紙面をかりて、日本語クラス開設を模索しているバングラデシュの高校を、日本語教育の普及といった観点から、その一例として取り上げてみたいと思います。日本語がさまざまな形で世界に普及していく中で、このような事例を紹介する機会を得たことをありがたいことであると思っています。

1 Rotary Betagi Union High School

ルパル先生の来日はまだ正式に決まったわけではないので、来られそうだったほうが正確な表現だろう。ルパルは名で、姓はバルア。日本式の呼び方ならバルア・ルパル先生。しかし、バルアという姓は多いのでルパル先生と皆から呼ばれている。男性、41歳。10年制学校の自然科学の教師で、奥さんは同じ学校の英語の教師。独り娘のリンビちゃんは小学部の3年生で、ベンガル語と算数と唱歌が得意。バングラデシュはイスラム教徒が多いが、先生の学校のある村の人口25,000の20%はヒンドゥー、10%は仏教で、先生一家は仏教徒である。

校名の頭にロータリーとついているのは国際ロータリー・クラブが支援

していることを示す。ベタギは地名、ユニオンは行政単位で村に当たる。ハイスクールはこの学校に高校部があることを示している。全校児童生徒800人、教職員25人、小学部5年、中学部3年、高校部2年で10年間の一貫教育を行なっている。ただし、高校部はジュニアの高校なので、ここを卒業しても大学に進みたいものは、このあと別のシニアの高校に2年通わなければならない。

ベタギ村はバングラデシュ南部のチッタゴン県ラングニア郡にある。県の中心のチッタゴン市は人口300万の第二の都市で、第二次世界大戦時のインパール戦でイギリス軍の後方兵站基地であったことで知られているが、現在は港の一角に外国資本の工場が立ち並び、政府が輸出振興に力を入れているのがわかる。その大都市から車で東へ2時間、大河コルナフリの北岸の、低くてなだらかな丘陵がところどころにある広々とした田園地帯がベタギ村である。村民の家屋のほとんどは樹木に隠れて見えない。そんな農村の中央の丘陵地帯の中腹に、白亜の二階建て鉄筋コンクリートの校舎が3棟、まわりの緑を見下ろすように顕然と建っている。ある口さがない日本人が言ったものだ。「こんなひどい国の、こんな田舎に、こんなすごいものがあっていいのだろうか」と。その校門の校名の下に小さく『Courtesy R.I.D.2770 JAPAN』と記されている。

RIDとは国際ロータリーの「地区」と呼ばれる単位で、80-100のクラブを統括しており、2770は埼玉県を南北に縦断する新幹線の東側の県域で、浦和・大宮をはじめ越谷などの79クラブ、約3,900人で構成されている。何かとまとまった大がかりな活動はこの地区単位で行なうことが多い。校門にはこの2770地区の「好意による」と掲げられているのである。

2 Eskandar A. Chowdhuryさん

2770地区の会員たちはルパル先生の来日を首を長くして待っている。ルパル先生は自然科学の先生なのに、関係者は先生に日本語も教えられる先生になってほしい、そして、必ずベタギ・ユニオン・ハイスクールへ戻っ

てほしいと願っている。それはどういうことなのか。どうして日本語教育が行なわなければならないのか。

ここで現地側の推進者のE A チョドリ氏について語らねばならない。氏はベタギ出身で現在65歳。西パキスタンのカラチの高校の教師をしていた30歳の時、日本の文部省の奨学金を得て来日した。国際基督教大学で小出詞子先生から日本語の手ほどきを受け、東京外国語大学で阪田雪子先生に日本語学の指導を受けた。文部省の奨学金が満了となった後、ロータリーの米山奨学金を受けて勉学をつづけた。米山奨学金といえば文教大学の外国人留学生が毎年5人は世話になっている。

さて、そのころ、故郷のベタギ村では恩師や同志が学校づくりを始めていた。有志の家の一角を教室にしたものでロータリー・ベタギ・ユニオン・ハイスクールの前身のベタギ・ユニオン・スクールである。

当時バングラデシュは東パキスタンと呼ばれるパキスタンの一部だった。パキスタンは1947年インドから分離独立し、西パキスタンと東パキスタンからなっていたが、双方の共通点はイスラム教徒が人口の3分の2の多数を占めていることだけだった。言語は西はウルドゥ語、東はまったく違ったベンガル語。西のほうが経済・政治・産業・教育などのすべての分野で強大で、官庁・軍隊などの高官はすべて西パキスタンから派遣され、東パキスタンのベンガル人は抑圧されていた。東は西の植民地のようだった。ついに西パキスタンは東西パキスタンの国語をウルドゥ語に統一すると言いだした。ベンガル人からベンガル語を取りあげるというわけである。ベタギ村の有識者たちは子供たちのために学校を作ることを急いだ。

氏は、しかし、日本にいるためにこの学校づくりに直接参加できない。そこで、各地のロータリークラブを卓話して回り、東パキスタンで何が起きているかを話した。そして、その謝礼を故郷にカンパしつづけた。

東パキスタンのベンガル人たちは抑圧と差別に対して、集会やデモ、ゼネストで対抗した結果、西パキスタンは武力弾圧に出て、1971年、8千万のベンガル人による西パキスタンからの独立のためのゲリラ戦が全土で

始まった。その結果大量の難民がインドに流れ込んだ。それが引き金となってインド・パキスタン戦争に発展。西パキスタンは東パキスタンを放棄した。ベンガル人はほぼ1年のゲリラ戦を戦いぬき、300万人の命の代償として独立を勝ち取った。国名をバングラデシュ・・・ベンガルの国・・・とした。国旗は緑地に赤い丸で模様は日本の日の丸に似ているが、緑は国土、赤は独立ために流れた血の色であるという。

氏はやがてキヨ婦人と結婚。長男のオンジョン君と3人で帰国。次男のオムラン君はベタギ村でコルナフリ川の水を産湯に使った。独立を果たした祖国は混乱と貧しさの中にあったが、復興を目指す人々は活気に満ちていた。氏もまた希望にあふれ、ダッカ大学に日本語科を開設、主任教授となって活躍する。しかし、独立後の政情はかならずしも安定せず、クーデター、大統領暗殺、軍事政権、反軍事政権デモ・ゼネストと政情不安がつづいたため、家族とともに再度日本へ。以後、海外青年協力隊ベンガル語講師、NHK海外向けアナウンサー、大学講師、裁判所特別通訳官など多くの仕事に従事したが、病を得て63歳の時すべての職から退いた。

3 RID2770との深いかかわり

ルバル先生が文教大学の別科へ日本語の勉強に来る場合、留学費用はどうなるのか。貧富の差が著しい国。一般公務員の月給は 3,000-5,000タカで、建築工事現場の労働者は1日に 200タカ。一人の食費は月に1,500タカぐらい。1タカは3.5円。一般教員の月給は2,000タカ程度なので、アルバイトで忙しい。1日1時間5回の出張個人授業で月に 700タカ。毎日2か所は回っている。

こんな状況では村の教員の自費による海外留学など思いもよらない。当然、奨学金が必要になる。そこで出てくるのがロータリーのさまざまな奨学金。年にUS\$ 22,000.00-29,000.00が給付される。ちなみに、日本の多くの大学生もこの奨学金で在学中に海外留学している。政治、宗教、性別に関係なく開放されているのだが、文教大学ではなぜか人気がない。

ロータリーの一般の奨学金は留学先の大学でその国の言語による授業に耐えられることが条件になるので、相当の語学力が要求される。

ルバル先生に適用される奨学金はM-2 JAPAN AMBASSADORIAL SCHOLARSHIPまたは日本国際親善奨学金と呼ばれ、主として日本語・日本文化を学ぶ外国人を対象としたものなので、それほど高い日本語力は求められない。この例外的奨学金は日本ロータリーの貢献度が国際的に高く評価された結果、新しく始まったもので、まだ数年しかたっていない。

政情不安定のつづく祖国から家族を守るため再来日したE Aチヨドリ氏は故郷のベタギ村の小さな私立学校を忘れ去ることができなかった。氏は息子さんたちの通う日本の学校を見るにつけ、故郷の村の子供たちの学習環境を何とか改善できないかと思った。そこでは血縁のA・H・チヨドリ同志が校長になって今も頑張っているのだ。恩師のハック先生も高齢にもかかわらず、ボランティアでしばしば教壇に立っている。ハック先生の息子のS・M・ハック同志は実業家になって、故郷の教育施設への支援を続けているのだった。

氏は思った。小学校に中学部と高校部を増設することはできないか。高校部が出来たら実業高校へと格上げしたい。村全体の民生の向上を図りたいものだ。ボランティアの力を借りよう。敷地を広くとって、教育と文化、生活向上運動のモデル地区を作ろう。電気も電話も今はないが、いつかは必ず来る。その時を見越して今から始めよう。

氏の根気の要る孤独な戦いは50歳のころから始まった。元ロータリー米山奨学生の氏は仕事の合間を見ては旧知のロータリークラブで卓話をする。その紹介で新しい知己を得る。氏は「日の当たらない所に光を」、「向上心をもって努力する人々に支援を」と、関東一円のロータリークラブで訴えて回った。7年の歳月が流れた。その間自分は無駄な努力をしているのかもしれないと何度思ったことか。そのたびに、旧知のロータリー会員に励まされては、初心に帰って卓話を続けた。

ついに、氏の真意を理解する人たちが現れた。1989年、埼玉の2770地

区がシカゴの国際ロータリー本部を通さずに、ベタギ村の受け皿・・・ BETAGI WCOGWILL FONUDATION・・・へ直接資金を投入する形で、地区のプロジェクトとして支援することを決めたのだった。FONUDATIONの会長には恩師のハック先生、運営委員にはかつての同志たち、自分は日本に生活の拠点がある関係から顧問という立場でプロジェクトを完成に導くことにした。長い長い準備期間は終わった。事は動きだしたら早い。1991年に第1校舎の「サクラ棟」、1992年に第2校舎の「チョンバ棟」、1994年に講堂兼体育館の「銀河講堂」と次々に完成し、1995年には通路、外塀工事、グラウンド整備、敷地内の3,000本の植樹が行なわれた。同時に念願の電気が通じ、電動式井戸が使えるようになった。ただし、電話はまだないが・・・。

寄付総額4,154万円で賄った敷地約1万坪、校舎面積 2,600平方米と付帯設備の落成・引き渡し式は1996年の2月、ロータリー関係者、FONUDATION関係者、全校児童生徒、教職員名と多数の父兄の喜びの歓声の中で無事に終了した。

この時EAチヨドリ氏は64歳になっていた。63歳の時にはすべての日本の職を退いて、単身の住まいを故郷のベタギ村に移していた。静養を必要とする体なのに、校舎完成後にもやらなければならないことが山ほどあるからだった。その時以来、一年の大半をFONUDATION内の調整と、特別日本語クラスの授業に当て、年に2度家族の待つ東京を訪れている。

2770地区からの組織的な支援プロジェクトは、引き渡し式の時に贈られた4万米ドルの「EAチヨドリ奨学基金」をもって完結した。あとは、地区内の各クラブが個別に支援活動を継続することになっている。村の子供たちのためのフォスターペアレント、同額補助金制度を活用する電話の敷設、医療活動のための基礎調査などなど、実行可能かどうか模索中である。これらはすべて、バングラと日本双方の関係者の夢であるところの、ベタギ村を「教育・生活・文化の向上運動のセンター」にするという大目標達成の基礎になるものなのだ。

4 民生向上の手段としての日本語教育

ルパル先生の帰国後の任務は重い。文教大学の留学生別科で日本語の運用能力をつけてから、バングラで初めての中等教育日本語講座を開設し、その時までには発足をみているであろう実業部の生徒に日本語を教えなければならぬ。先生の留学は2000年の4月から1年間と予定されている。現在、同僚3人と、それに上級生徒の14人と一緒に週に3時間E A チョドリさんから日本語の基礎を学んでいる。同僚3人はルパル先生につづく留学候補者である。また上級生徒たちもチッタゴンの師範学校や大学を卒業した後、村へ戻ってルパル先生の後につづくかもしれない。今から少しでも日本語を勉強しておいたほうがいい。

バングラ側の係者たちは、どうしてこれほどまでに日本語を強く求めるのだろうか。もちろんこれはE A チョドリさんの影響による。氏はみなに次のように語って聞かせる。日本語ができるようになると、世界中のことが日本語に訳されているので見える世界が地球規模になるというのが第一。日本を実際に知ると、アジア人でも多くのことができることがわかるというのが第二。日本人と話す時、英語ではなく日本語じゃなきゃ駄目。日本語で話せば技術を喜んで教えてくれるというのが第三。日本人は他人を思いやる心が強い。しかし、これは日本語がわからなきゃ通じないというのが第四。だから日本は学ぶ価値があると説く。これらは氏の日本在住30年の観察と経験に基づいている。

氏はつづける。この村で今必要としている木工、工芸、電気、配線、建築、園芸、木工、養殖、縫製、陶芸、医療などの専門家がロータリー会員に多い。彼等はボランティア制度を利用して喜んで来てくれると。

一方、2770地区には、バングラを知っている会員が多い。彼らはこれまでの長い交流の経験からバングラの人たちは非常に手先が器用で技術習得に熱心な上、非常に勤勉であると高く評価して、バングラに工場を置くことを検討中であつたり、技術研修生として日本の本社・支社にすでに受け入れていたり、また、これからの受け入れを予定している。その上、イ

スラム世界を語る時、避けて通ることのできない、いわゆる「パルダール」の原則・・・女性が生産活動と社会的交渉から隔離され、男性によって扶養される権利を持ち、女性独自の生活空間に生きることのできる男女隔離の原則・・・についても、チッタゴンの外国資本による工場群を訪れ、若い女性たちが一生懸命に労働に従事している様を目のあたりにして、その原則が大きく変貌するのも時間の問題だろうとみている。

5 夢の実現に向けて・・・・・・・・

双方の関係者が当初から抱いていた日本語クラス開設の構想が、2770地区大会や国際奉仕部門で大きなテーマとして取り上げられるようになったのは、第1校舎の「サクラ棟」が完成し、地区プロジェクトとして完遂できる見通しの立った1991年のことだった。地区はまず日本から日本人の日本語教員を即刻送り込むことを考えた。そして、国際交流基金と海外青年協力隊に打診した。結果はNO。どちらも政府レベルで派遣事業を行っているのだから、NGOの一つである国際ロータリーが頼んでも無理だとわかった。そこで、民間の日本語学校にも当たってみたが、発展途上国の電気も電話も水道もない村へ、たとえ年に2週間といった短期間であっても、無報酬で教えに行こうという日本語教師は現れなかった。地区はだれかいなか、だれかいなかと探しつづけた。日本からなんとかして日本語教師を送り込もうと考えたのだ。4年の歳月は瞬く間に過ぎ去り、1996年2月の引き渡し式が近づいていたころだった。ロータリークラブに入ってまだ日の浅い日本語教師の会員が「現地の教員を日本へ留学させ、現地人の日本語教員を養成する」方法はどうかと提案した。コロンブスの卵だった。地区は急遽彼を現地に派遣し、クラス開設の可能性を探らせた。現地はゼネストで数十人もの死者が出ている状態だったが、EAチヨドリ氏やダッカ大学の西川格先生らの協力を得て、以下の結論を出した。

A 高校内の雰囲気づくり

- ① 学習グループ（日本語会話クラブ）を結成する。そのリーダーに

は日本留学を希望する複数の教員を当てる。

- ② 活動の場として、「JAPAN ROOM」を設置する。これまでに各クラブから寄贈されて、あちこちに分散保管されている日本語教材、雑誌、カレンダー、絵本類、地図類、玩具類、スポーツ用具、文具類などをここにまとめる。また、今後寄贈されるもので日本語教育に役立つものもここに保管し、鍵はリーダーの教員が管理する。
- ③ E Aチヨドリ氏はグループに対し適宜日本語を指導し、ボランティアの日本語教師訪問をただちに日本語学習活動へと結びつけられるようにしておく。
- ④ 高校はボランティアのための宿舎を用意し、生活用具をそろえる。

B 中堅の教員に奨学金を給付し、日本へ留学させる。

2770地区はロータリー財団の一つのM-2日本国際親善奨学金を3280地区（バングラデシュ1国、90クラブ）に寄贈する本部手続きを開始すると同時に、候補者の中に同校の教員含まれるよう地区同士の連絡を密にする。

C シニア高校部の増設

現行の10年制を12年制に格上げする。日本の高校と同格になればロータリーの青少年交換プログラムの対象となり、2770地区内の高校に1年間の留学ができるようになる。

D 実業部門の増設

政府の奨励する科目のうち、認められる最少の科目で始める。WOODWORKING とELECTRIC HOUSE-WIRING がよい。村にはようやく昨年から電灯が点るようになったのだから、需要度が高い。たとえ小規模でも、その道のボランティアの活躍の場が生まれる。

E ローターアクトクラブを大学内につくる。

日本語教員養成コースを持つ2770地区内の大学に同クラブを設ける。ローターアクトはロータリーボランティアとして本部に登録することができ、日本語教育だけでなくさまざまなボランティア活動に

対し、本部および地区から補助金が出る。もし、文教大学の中にできれば、ボランティア学生たちの活動の場が海外へも大きく広がる。

AとBはすでに実現した。なかでもBの手続き完了は意義深い。あとは現地サイドが本部の指示にしたがって、該当者の留学の手続きをすればよいだけになっている。これが1回だけでなく2・3年継続して毎年1人ずつ留学できたら望みどおりの効果が上がるだろう。ルパル先生の帰国・正規クラス開設と同時に、公的機関に支援の申し込みをする。日本人日本語教師の公費派遣は無理だろうが、教材・機器の寄贈や教員の再教育のプログラムへの参加が実現するだろう。その後、大学へ進学した卒業生が日本文部省の奨学金で日本留学するケースも考えられる。そうやって、ようやくベタギ村に第二、第三のEAチヨドリの出現する条件が整うのだ。

6 おわりに

EAチヨドリ氏の夢に共鳴した2770地区がプロジェクトとして取り上げてからは8年だが、母語を守ろうとして民家の一室で始まった小さな学校が800人の生徒を擁する10年制高校に発展するまでに28年の歳月が流れたのだった。

昨年の8月10日、チッタゴン県中等教育委員会のお役人が表彰状を持って高校を訪れた。表彰状には「1997年の4月に行なわれた全県統一卒業試験で、ロータリー・ベタギ・ユニオン・ハイスクールはラングニア郡(チッタゴン県内22郡の一つ)の28高校のうちで最優秀の成績を修めた」と書かれていた。創立以来初めての快挙である。立派な校舎と郡内最優秀の成績。関係者の努力は少しずつ実を結んでいくように見える。

しかし、あいかわらず村人の収入は乏しく、生活レベルははなはだしく低い。関係者の描く夢の十分の一も実現しておらず、目標は遙かに遠く、これからも限り無い努力が求められる。

日本の行なう発展途上国援助はややもすれば大海に塩を撒くが如くで、また熱帯雨林の中に埋没していたり、砂漠で熱砂に赤さびている。発展途

上国援助を錦の御旗に掲げたODAのプロジェクトは関係する日本企業をたっぷりと肥やしている。

そんな中であって、地球上で最も貧しいとされる国の、この農村で進行中の、「教育・文化・生活向上運動のモデル地区建設を目指す」という運動に『日本語』と『日本人』が、強いプラスの方向性をもった刺激剤となって、大きく関与している事実にした私は胸が震え、心臓が高鳴るほどの感動をおぼえている。